（３） 性感染症定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科泌尿器科学分野
教授　　榎田　英樹

令和３年１月から 12 月における鹿児島県内 16 定点からの性感染症４疾患の患者報告数は，(1) 性器クラミジア感染症 537 人，(2) 性器ヘルペスウイルス感染症 79 人，(3) 尖圭コンジローマ 86 人，(4) 淋菌感染症 272 人であった。報告数の合計は 974 人であり，令和元年の報告数 853 人から 121 人（14.1%）増加し，令和２年の報告数 835 人からは 139 人（16.6%）増加した。疾患別の増減では，性器クラミジア感染症および淋菌感染症において報告数が増加しており，特に，淋菌感染症は昨年比 40.2%と最も大きく増加し，性器クラミジア感染症も 18.5%と増加した。性器ヘルペスウイルス感染症は昨年比で 16.0%減であり，４年連続で減少した。また尖圭コンジローマは昨年比で 8.5%減であり６年ぶりに減少した。

(1) 性器クラミジア感染症は *Chlamydia trachomatis* が原因微生物の性感染症であり，男性では尿道炎，精巣上体炎を，女性では子宮頚管炎，骨盤腹膜炎などを発症する。令和３年の患者数は，令和２年の 453 人から 84 人（18.5%）増加し 537 人であった。月別の報告数は令和元年，令和２年と比較するとほぼすべての月で報告数が増加していた。保健所別報告数では，鹿児島市，姶良，川薩の順に多く，全体の約 84.5%を占めた。年齢層別の比率をみると，５年連続で 20～24 歳（27.0%），25～29 歳，30～34 歳の順に多く，これらの３年齢層で全体の約 61.6%を占めたが，特に 20～29 歳での増加が顕著であった（昨年比 27.9%増）。また 15～19 歳における患者数は 32 人で横ばいであった。15 歳～29 歳の性器クラミジア感染症患者 293 人は性感染症４疾患全体の約 30%占め，同年代での男女比は 1.3：1 で男性の比率が高かった。

(2) 性器ヘルペスウイルス感染症は，単純ヘルペスウイルス（herpes simplex virus: HSV，HSV 1 型又は２型）の感染により発症する。令和３年は 79 人が報告され，令和２年の 94 人から 15 人（16.0%）減少した。全体の男女比はほぼ同率であった。月別の報告数は令和元年，令和２年と比較して７月、８月，12 月を除きほぼ全ての月で報告数が減少していた。保健所別報告数では，鹿児島市が 52 件と最も多く，全体の 65.8%を占めた。年齢層では 20～44 歳の患者が 53 人と全体の 67%を占めていた。

(3) 尖圭コンジローマは，ヒトパピローマウイルス（ヒト乳頭腫ウイルス：HPV）の感染により，性器周辺に生じる有疣状腫瘍である。令和３年の患者数は 86 人であり，令和２年の 94 人より８人（8.5%）減少し，６年ぶりに減少した。患者年齢層別では 20～24 歳，25～29 歳，30～39 歳の順に多く，20～29 歳が全体の 40.7%を占めたが，令和２年と比較すると 35～39 歳を除いた全ての年齢層で患者数が減少していた。男女比は 3.5：1 と圧倒的に男性で多く見られた。月別の報告数は，定点あたり 0.5 人前後で変動は少なかった。保健所別報告数では鹿児島市，姶良の順に多く，併せて全体の 87.2%を占めた。

(4) 淋菌感染症は *Neisseria gonorrhoeae* による性感染症であり，男性では尿道炎，精巣上体炎を，女性では子宮頚管炎や骨盤腹膜炎を発症する。令和３年の淋菌感染症の患者数は 272 人であり，令和２年の 194 人から 78 人（40.2%）と大きく増加した。月別の報告数をみると以前みられていた夏季に限って多い傾向は認められず，10 月が最も報告数が多く６月が最も少なかった。ま

た，令和元年，令和 2 年と比較して 2 月と 6 月を除くすべての月で報告数が増加していた。保健所別報告数では、姶良，鹿児島市，川薩の順に多く全体の 86.8%を占め，特に姶良からの報告は全体の 46.3%と突出していた。年齢層別には 15 歳～29 歳の年齢層が全体の 57.7%を占めた。また 20～24 歳では前年比 219%と著増していた。男女比は 3.9:1 と圧倒的に男性で多く見られた。

令和 3 年の性感染症発生動向の特徴は，令和 2 年と比較して性器クラミジア感染症と淋菌感染症の報告数が増加し，性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマは減少したことが挙げられる。性器ヘルペスウイルス感染症を除いた 3 疾患において 20 歳～29 歳の比率が 30 歳～39 歳の比率と比べて高かったこと，淋菌感染症においては前年と同様に女性の比率が 20.6%と 4 性感染症の中では最も低かったことであった。また，全ての性感染症において 15 歳未満における患者発生比率がゼロであり，15～19 歳においても感染数が前年比で横ばいであったことは好ましい結果といえる。また淋菌感染症においては前年に引き続き，姶良保健所からの報告数が最も多かったことが地域的な特徴であった。

鹿児島県の性感染症発生状況の年次推移と疾患別男女比

平成 11 年から令和 3 年の 4 性感染症の 1 定点あたり報告数の年次推移を見ると，令和 3 年は 60.9 であり，令和 2 年は 53.0 であったので 14.8%の増加となった（図 1)。男女比は 2.2:1 と男性の比率が前年より低下した。性器クラミジア感染症と淋菌感染症の男女比はそれぞれ 1.9：1，3.9：1 であった（図 2)。平成 27 年までは性器クラミジア感染症の男女比が等しいことが鹿児島県の特徴であったが，5 年連続で男性患者数が女性患者数を上回り、男性の比率が年々上昇している。性器クラミジア感染症は女性患者が多いとする厚生科学研究班の全国サーベイランス報告や全国総数の男女比とは異なった結果であり，本県の性感染症の特徴として今後も動向の監視が必要である。

図1　4性感染症の年次別定点当たりの報告数

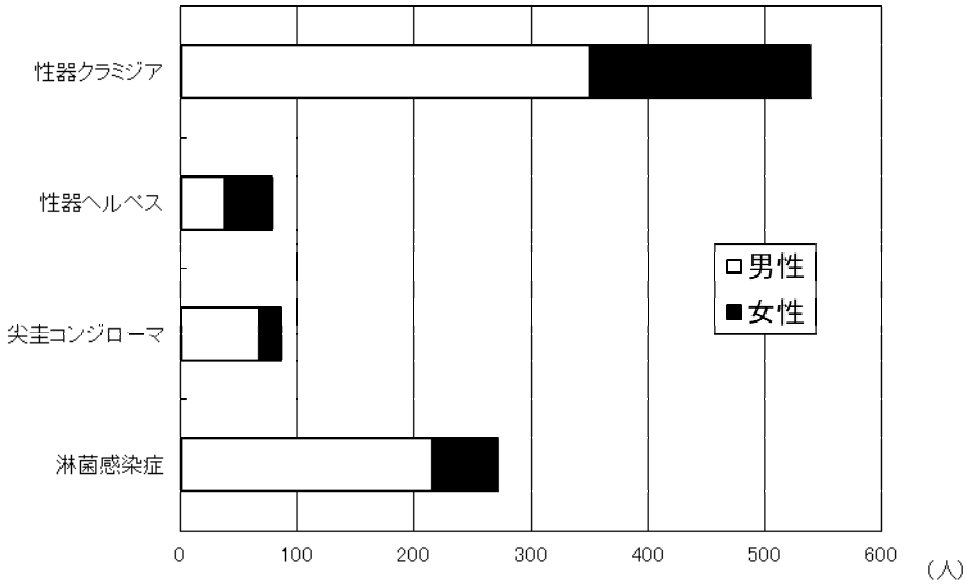

図2　令和3年の性感染症の疾患別男女別報告数(鹿児島県)

22)性器クラミジア感染症

（定義）*Chlamydia trachomatis* による性感染症である。

令和3年の性器クラミジア感染症の報告数は537人(累積定点当たり報告数33.56)で，令和2年(453人)より84人多かった。平成29年(517人)，平成30年(467人)，令和元年(443人)と推移した。月別報告数では，8月（48人）が最も多く，例年よりも高値で推移した(図2-22-1)。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1,1倍とほぼ同水準で推移した。年齢別では，20～24歳(27.0%)，25～29歳(21.6%)，30～34歳(13.0%)の順に多かった(図2-22-3)。

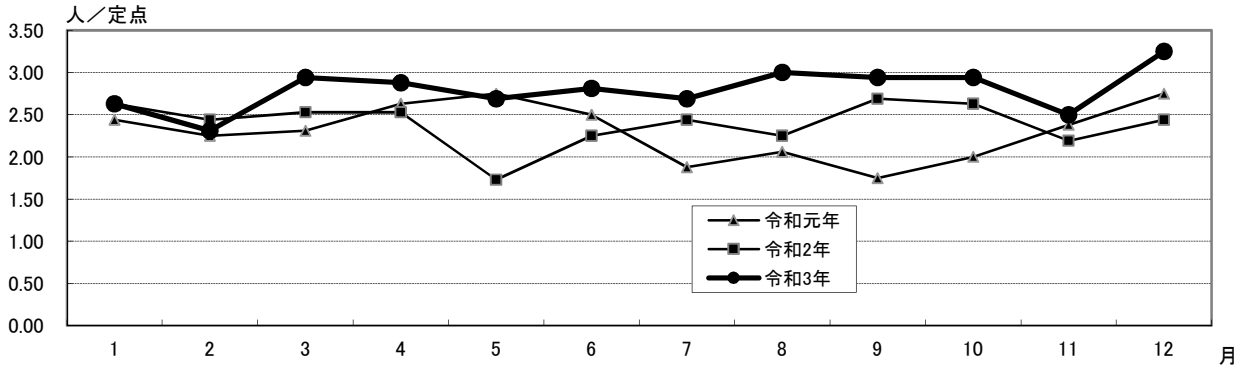

図2-22-1　年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

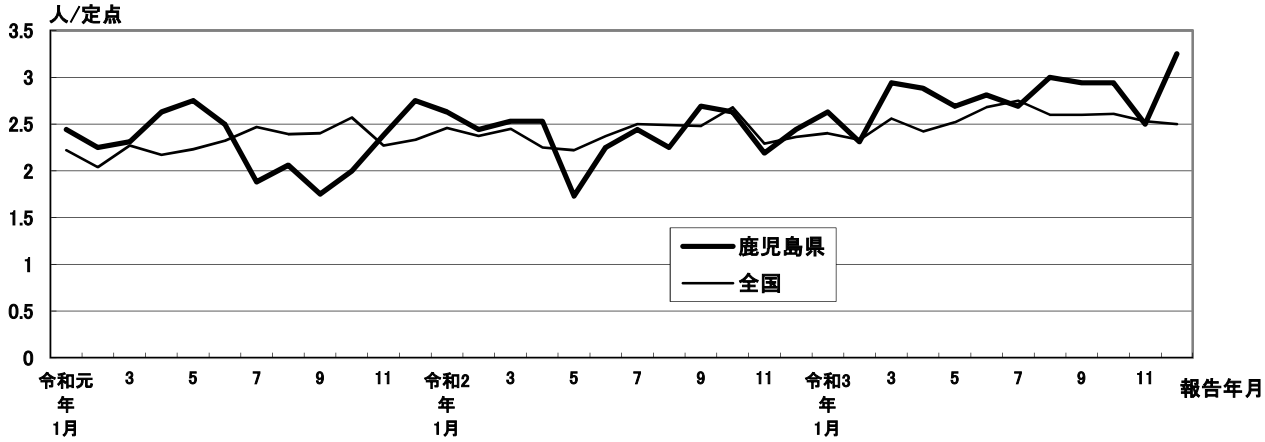

図2-22-2　定点当たり報告数の推移(鹿児島県，全国)

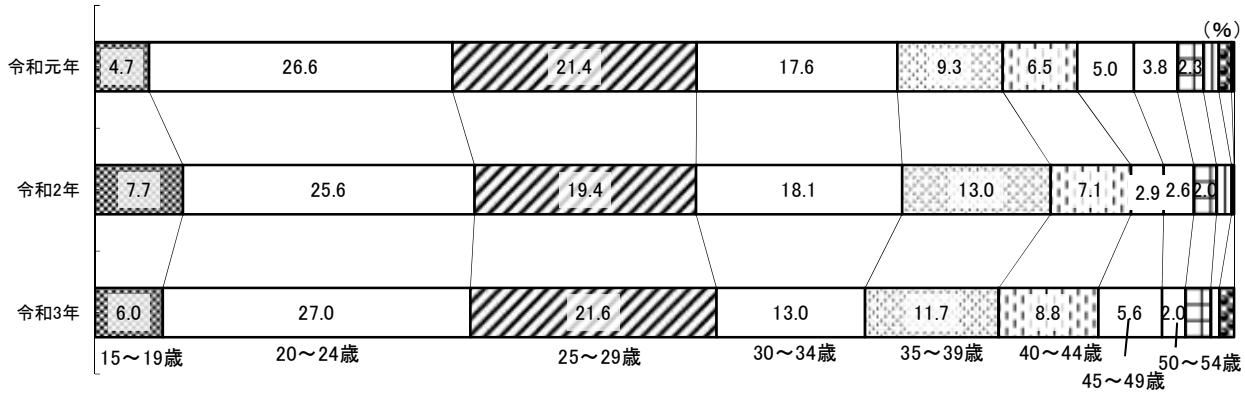

図2-22-3　年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

23)性器ヘルペスウイルス感染症

（定義）　単純ヘルペスウイルス（herpes simplex virus:HSV, HSV1型又は2型）が感染し，性器またはその付近に発症したものを性器ヘルペスという。

令和3年の性器ヘルペスウイルス感染症の報告数は79人（累積定点当たり報告数4.96）で，令和2年（94人）より15人少なかった。平成29年（119人），平成30年（109人），令和元年（102人）と推移した。月別報告数では，8月（13人）が最も多かった（図2-23-1）。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約半数で推移した（図2-23-2）。年齢別では，30～34歳（17.7%），40～44歳（13.9%），20～24歳，35～39歳（それぞれ12.7%）の順に多かった（図2-23-3）。

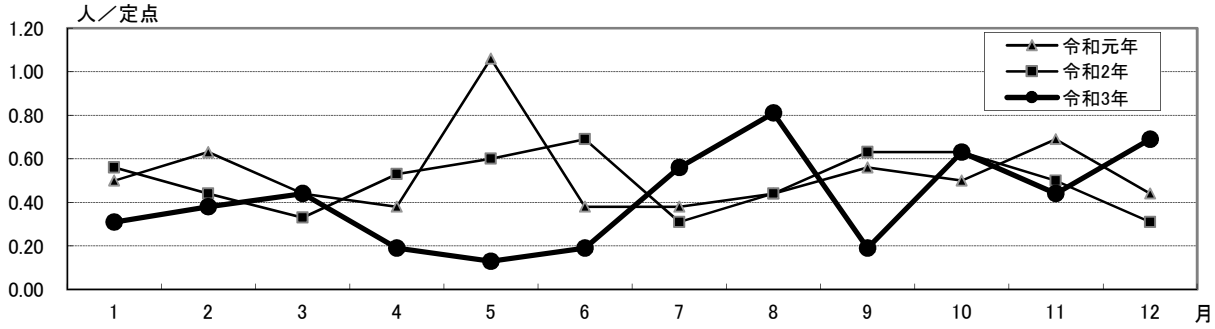

図2-23-1　年次・月別定点当たり報告数の推移（鹿児島県）

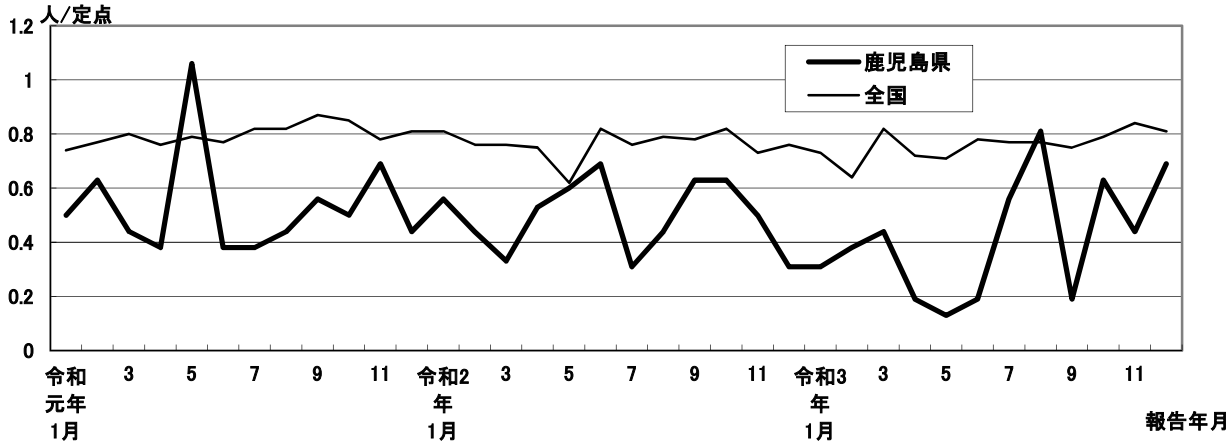

図2-23-2　定点当たり報告数の推移（鹿児島県，全国）

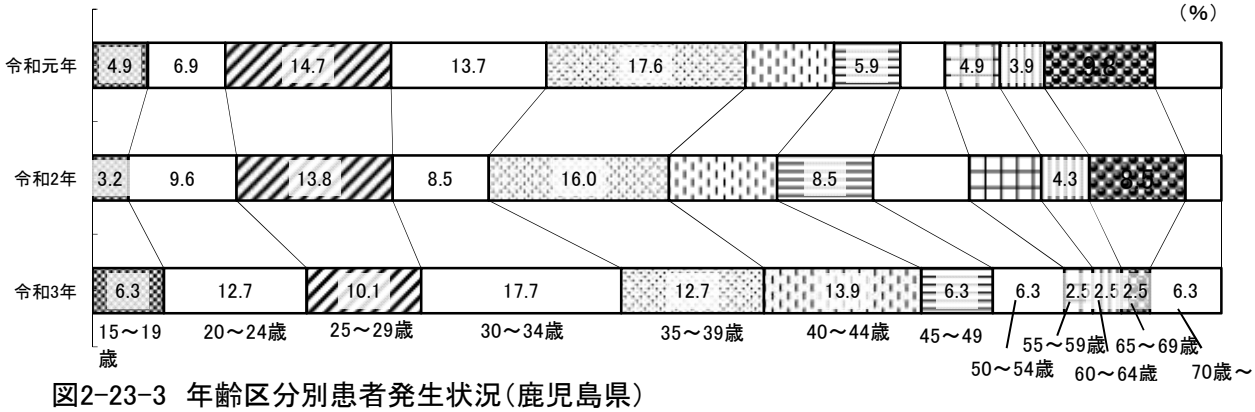

図2-23-3　年齢区分別患者発生状況（鹿児島県）

24)尖圭コンジローマ

（定義）尖圭コンジローマは，ヒトパピローマウイルス（ヒト乳頭腫ウイルス，HPV）の感染により，性器周辺に生じる腫瘍である。ヒトパピローマウイルスは，80種以上が知られているが，尖圭コンジローマの原因となるのは，主にHPV6型とHPV11型であり，時にHPV16型の感染でも生じる。

令和3年の尖圭コンジローマの報告数は86人（累積定点当たり報告数5.40）で，令和2年（94人）より8人少なかった。平成29年（51人），平成30年（63人），令和元年（86人）と推移した。月別報告数では，10月（10人）が最も多かった（図2-24-1）。累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約0.9倍とほぼ同レベルで推移した（図2-24-2）。年齢別では，20～24歳（22.1%），25～29歳（18.6%），35～39歳（16.3%）の順に多かった（図2-24-3）。

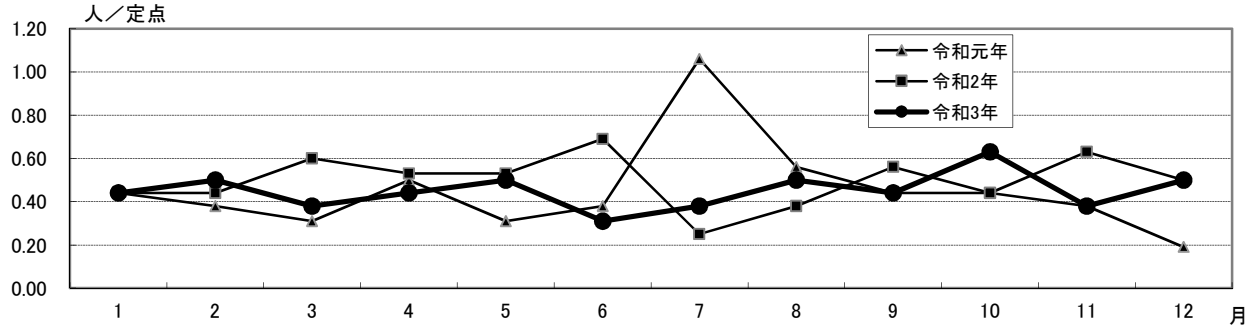

図2-24-1　年次・月別定点当たり報告数の推移（鹿児島県）

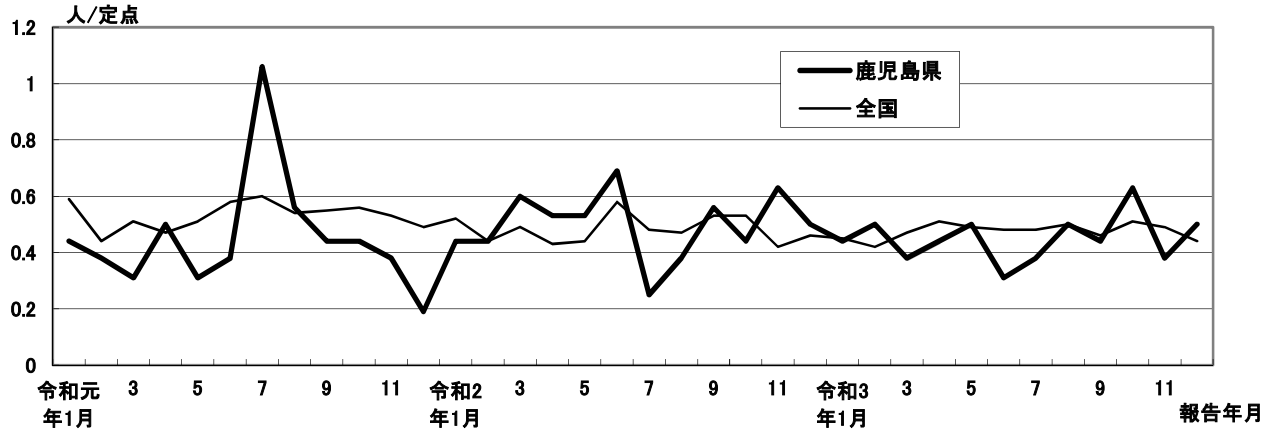

図2-24-2　定点当たり報告数の推移（鹿児島県，全国）

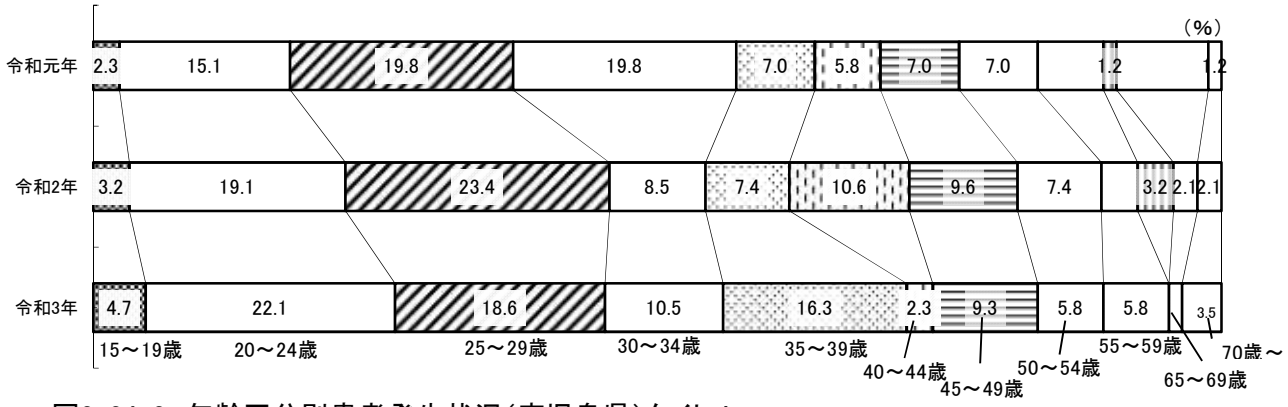

図2-24-3　年齢区分別患者発生状況（鹿児島県）タイトル

25)淋菌感染症

（定義）　淋菌（*Neisseria gonorrhoeae*）による性感染症である。

令和3年の淋菌感染症の報告数は272人（累積定点当たり報告数17.00）で，令和2年（194人）より78人多かった。平成29年（273人），平成30年（235人），令和元年（222人）と推移した。月別報告数では，10月（35人）が最も多く（図2-25-1），累積定点当たり報告数をみると本県は全国の約1.6倍と常に高めで推移した（図2-25-2）。年齢別では，20～24歳（29.0％），25～29歳（19.1％），35～39歳（11.4％）の順に多かった（図2-25-3）。

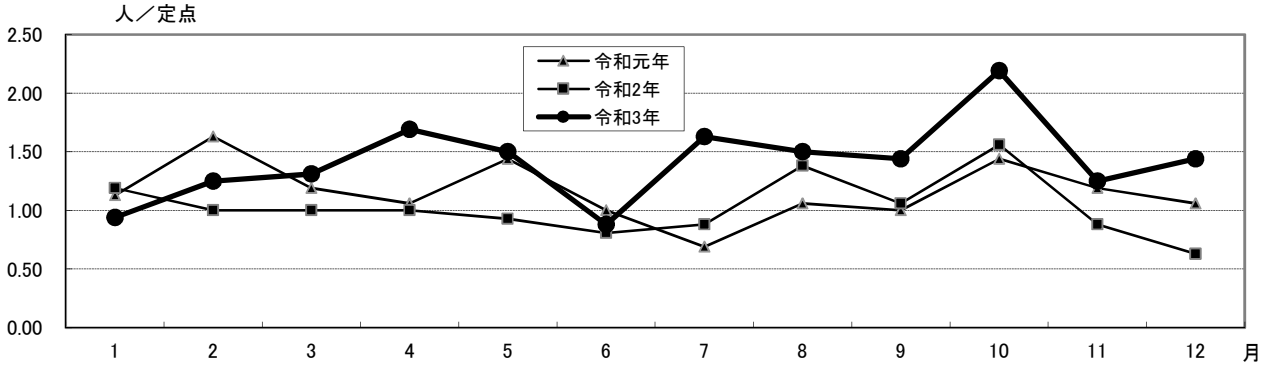

図2-25-1　年次・月別定点当たり報告数の推移（鹿児島県）

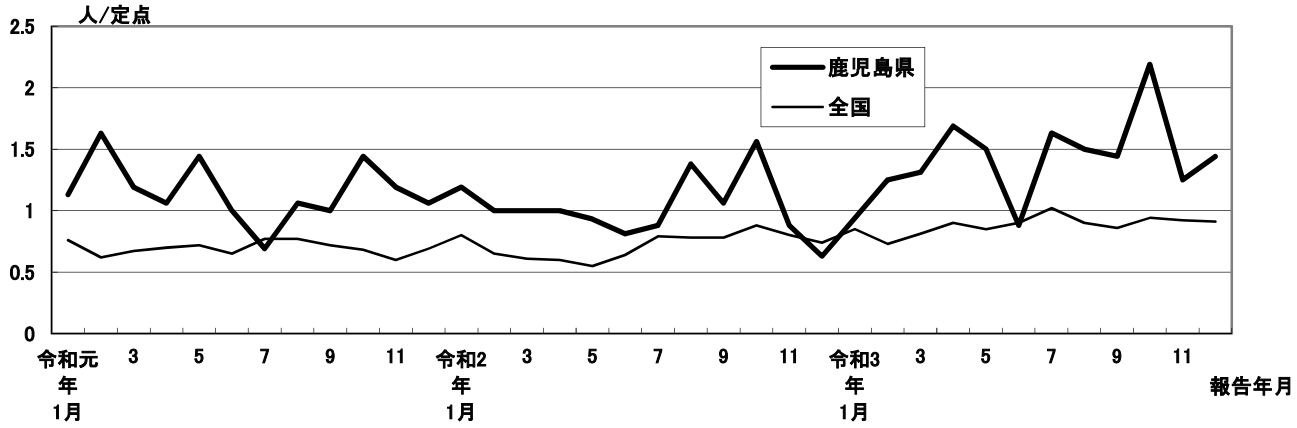

図2-25-2　定点当たり報告数の推移（鹿児島県，全国）

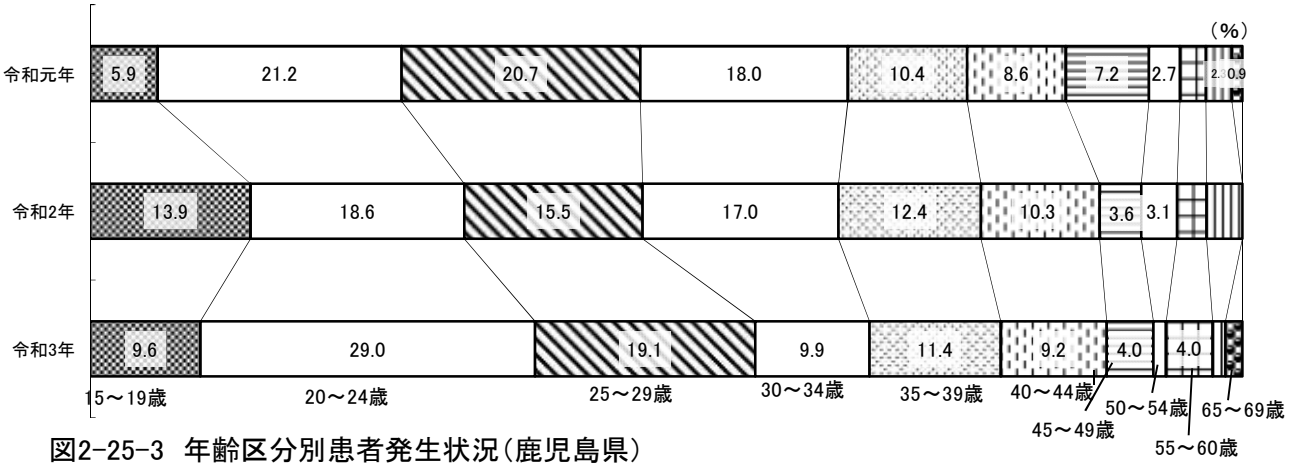

図2-25-3　年齢区分別患者発生状況（鹿児島県）